

入華プロテスタント宣教師と日本の書物・西洋の書物

八耳 俊文

はじめに

19世紀前半に入華したプロテスタント宣教師がおこなった印刷伝道は、直接伝道が困難という制約のため採られた方法であったが、キリスト教の伝道以外に、中国研究の進展、翻訳語・新語の誕生、印刷技術の発展などの多くの文化的副産物をもたらした。近年、宣教師たちが著した中国語出版物への関心が高まり、様々な分野から成果が発表されるようになったのは、この出版活動にともなう文化的意味の大きさを物語っていると言えよう。これらの中には印刷物の中国語著作を最終テキストとみて、本文を分析しその後の影響を論じるだけでなく、これらテキストが生成する過程に焦点をあてた研究も現れてきた^[1]。

本稿では中国語テキストを著した西洋のプロテスタント宣教師が参照した日本や西洋の書物を論じる。最近、江戸期に日本語が漢語に与えた影響の可能性が議論されるようになった^[2]。本稿はこれに直接、応えるものではないが、メドハースト (Walter Henry Medhurst, 1796-1857) とウイリアムズ (Samuel Wells Williams, 1812-1884) を例に、彼らが1820年の終わりから30年代にかけて日本の書物を利用・入手したことを紹介し、その意味を考察する。江戸期の日本を、国外から独自に知ることはほぼ不可能であった。国外で日本人に遭遇することはなかったし、日本の文化を想像するに日本の輸出品はあまりに種類が限られていたからである。唯一の例外は漂流民であり、日本の書物であった。メドハーストとウイリアムズの二人は国外にあって日本の書物を手に入れ、日本に関する知識を得た。ウイリアムズはさらに漂流民を情報源にもった。本稿では、さらに上海における1850年代のロンドン伝道会の蔵書を紹介し、墨海書館に集まったロンドン伝道会宣教師の知的背景をさぐる。

1 バタヴィアでメドハーストが利用した日本の書物

上海のロンドン伝道会の印刷所、墨海書館の創設者で「墨海」の名前の由来となったメドハーストが^[3]、中国で本格的な活動を開始したのは南京条約以後であり、それ以前はマラッカ

(Malacca) やペナン (Penang) , バタヴィア (Batavia, 現ジャカルタ) などの東南アジアの各地で布教活動に携わっていた^[4]。中でもバタヴィアでの生活が長く、1820年代から1830年代の大部分はバタヴィアがメドハーストの主たる活動拠点であった。

バタヴィアは日本情報が最初に持ち込まれる場所であった。日本が開国するまで西洋人が日本の事情を直接入手するには、オランダ東インド会社か、1799年に同会社解散後にはオランダ領東インド政庁の、長崎出島商館員か、商館付の医員として来日するしか方法はなかった。彼らはバタヴィアから来日し、バタヴィアへと帰っていった。そもそもバタヴィアはその地名からオランダの命名になり、東オランダ会社の拠点として建設された都市であった。1778年には同地にバタヴィア学芸・科学協会が設立され、会誌 (*Verhandelingen van het Bataviaansch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen, Batavia*) には、日本に関する情報も掲載された。

1827年、バタヴィアにいたメドハーストはある人物から日本の凶書を借覧する機会を得た^[5]。モリソン (Robert Morrison, 1782-1834) やミルン (William Milne, 1785-1822) も日本語に大いに関心を寄せていたが、二人とも日本語そのものにふれる機会を持たなかった。メドハーストは好機とばかり10人ほどの中国人を雇い筆写に努めた。メドハーストが『中国：現状と将来』 (*China: Its State and Prospects*, London, 1838) で述べているところによれば、これらは (1) 複数の辞書、(2) 訓点つきの漢文の『四書』、(3) 歴史小説書、(4) 医薬、植物、鉱物、歴史、日本の統計を扱う数冊の書物より成り、(1) の辞書には (a) 日本人編集の蘭-中-日辞書 (Dutch, Chinese, and Japanese dictionary) , (b) イロハ順の日-中-蘭辞書 (Japanese, Chinese, and Dutch dictionary, arranged according to the Japanese alphabet) , (c) 二三冊の部首別の漢和辞書、(d) いろは順の和漢辞書があったという。うち (d) の和漢辞書は絵入りの百科事典で、武器や道具、行儀や習慣、歴史や冒険、地理や天文、図譜・地図や年表が載っていたと記している (なお 1 や a などの記号は筆者が整理上つけたもので原文にはない) 。

メドハーストは日本人に会ったことはなかった。しかしこれらの書物を通じ日本語に関する知識を得ると、『英和・和英語彙』をまとめ、1830年にバタヴィアにて石版刷で刊行した。 *An English and Japanese, and Japanese and English Vocabulary* がそれで、英和の部は英語を見出しに、それに対応する日本語 (アルファベット表記) , カタカナ、一部、漢字が付けられ、和英の部についてはカタカナを見出しに、以下、そのアルファベット表記、対応する英語が付けられていた。言葉の配列は英和の部は天地人ではじまる主題別、和英の部はイロハ順である。見出し語数は、英和の部は約5000項目、和英の部は約6000項目あった^[6]。

『英和・和英語彙』のタイトルページには「日本の書籍をもとに編集」 (Compiled from Native Works) と記され、序でも「日本からやってきた数人の紳士」 (several gentlemen from Japan) の

厚意により何冊かの日本の書籍 (some native books) を閲覧でき、漢字の知識があったおかげで、特に日本語と漢字が併記されている書物を通じ、本書が完成したと説明されている。この「日本の書籍」が何であるか、『英和・和英語彙』は具体的に明らかにしないが、日露辞典の編纂者ゴシケヴィッチ (Iosif Antonovich Goskevich, 1814-1875) は『和魯通言比考』(1857)の序の中で、メドハーストの『英和・和英語彙』は1810年に日本で出版の「*Nieuw-verzameld japansch en hollandsch woordenboek*」(八耳注, *Nieuw* は *Nieuw* の誤りか。新修日蘭辞書の意)により作成されたと記している^[7]。1810年刊で同オランダ語名を書物にもつのは、『蘭語訳撰』(分野別のイロハ順の和蘭辞書)であるため、『蘭語訳撰』をもとに『英和・和英語彙』が編集されたと説明されたりしている^[8]。しかし当編集者であるメドハーストの『中国』によれば、蘭和辞書も和蘭辞書も利用したとあるので(メドハーストの書き方によれば, Dutch, Chinese, and Japanese dictionary あるいは Japanese, Chinese, and Dutch dictionary とされるが、この Chinese とは漢字のことで、カタカナ語、漢語、オランダ語の対応辞書というより、漢字交じりのカタカナ語とオランダ語との対応辞書、つまり、蘭和辞書あるいは和蘭辞書と思われる)、また他の和書も利用したというから、特定の一冊でなく複数の書物を参照して成り立っていると言うべきであろう。

『英和・和英語彙』の献辞はオランダ領東インド総督ヨハネス・ファン・デン・ボス (Johannes van den Bosch, 1780-1844) 宛に1830年3月24日の日付で捧げられている。この2ヶ月前の1月28日、シーボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796-1866) がシーボルト事件で国外追放となり出島からバタヴィアに戻ってきた^[9]。3月15日までの47日間、シーボルトはこのバタヴィアの地で過ごしたが、メドハーストは、早速、この日本情報を豊富に持ち帰った人物に接触をはかっている。

現在、長崎のシーボルト記念館にはファオン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家シーボルト関係文書のマイクロフィルムが所蔵されており、ここにメドハーストからシーボルト宛に送られた書簡や、メドハースト関係資料が残されている^[10]。シーボルト宛の書簡は蘭文で記され、シーボルトがバタヴィア滞在中の1830年3月9日付、このほか同年5月9日付、7月27日付、1831年4月4日付、1836年3月11日付、1837年7月19日付、年月不明25日付の計7通、さらにメドハーストの蘭文による招待状、父と兄弟に宛てた1830年3月3日付のメドハーストの英文書簡、メドハースト夫妻の住所メモといった資料を見ることができる^[11]。1837年7月19日付書簡はメドハーストが一時、イギリスに帰国したさい、ロンドンからライデンのシーボルトに送付したもので、二人はバタヴィアで出会った以降も交友があったことを示している。

日付の最も早い1830年3月3日付の父と兄弟宛のメドハーストの英文書簡によれば、日本語の研究に多大の時間を費やしていると記され、またシーボルトにより収集された日本の書籍は1500冊以上と説明する文がみられる。これから『英和・和英語彙』の序文にあった数人の紳士のうち一人は、シーボルトとみなして間違いないであろう。序には披閲したのは「何冊かの日本の書籍」と控えめな数字を挙げるが、これは英和和英の語彙の編集が1827年から開始され、ほぼ完成の時期にシーボルトに出会い、彼のコレクションを活用する時間的余裕がなかったためと解することができる。

シーボルトのコレクションの詳細は、『新・シーボルト研究』第1巻(2003)の「日本図書及手稿目録」(向井晃編)で知ることができる^[12]。それによると、シーボルトの収集文献(シーボルトは2回来日しているが、この第1回目の収集分)は503点あり(冊数ではない)、和蘭辞書、蘭和辞書としては『訳鍵』『江戸ハルマ』『和蘭辞書』『蛮語箋』の4点があったことがわかる。同目録ではシーボルトの1年前の1829年、出島からバタヴィアに戻ってきたオランダ商館員フィッセル(Johan Frederik van Overmeer Fisscher, 1800-1848)にも日本の書籍を69点の収集があったことを伝えており、メドハーストに日本の書籍を見せた「日本から戻った数人の紳士 several gentlemen」の一人に、このフィッセルも含まれていると考えられる。日本語の辞書としては、和漢三才図会や訓蒙図彙系本がシーボルト収集物に、節用集がフィッセル収集物に見いだすことができる。

メドハーストの『英和・和英語彙』はその後、日本に伝わり、村上英俊(1811-1890)の関により原文の活字体が筆記体に改められ翻刻出版された。『英語箋(一名米語箋)』で、英和の部は前編3冊として安政四年(1857)に、和英の部は後編4冊として文久三年(1863)に刊行されている。メドハーストは東アジアの言語としてハングルにも興味を抱き、洪舜民編集の日本語と韓国語の対訳辞書である『倭語類解』(1780)を英訳、*Translation of a comparative vocabulary of the Chinese, Corean and Japanese languages* (Batavia, 1835, 別名『朝鮮偉國字彙』)としてまとめている^[13]。この書はシーボルトの『日本』第11編「朝鮮」で言及されている^[14]。

2 広州とマカオでウィリアムズが入手した日本の書物

欧米人のコミュニティが形成されていた広州やマカオでは日本の書籍が伝わっていたのであろうか。これを考える一つの材料として、『中国叢報』(*The Chinese Repository*) 9巻(1840) 2号に掲載された「鼓銅図録、銅の製錬についての論文。図入り。小型の二つ折り本、20葉。日本語の原本から翻訳」と題する論説を取り上げよう^[15]。内容は日本の鉱山技術書『鼓銅図録』の翻訳であるが、はじめに広州やマカオで著者が収集したという日本の書籍の紹介がある。

著者は明記されていない。しかし論文の最後に「W」とあることから、『中国叢報』の編集者サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ（Samuel Wells Williams, 1812-1884）と考えられる。ウィリアムズは米国ニューヨーク州に生まれ、アメリカン・ボード（American Board of Foreign Missions）から中国伝道の印刷担当者として派遣され、1833年10月に広州に到着し^[16]、米国人宣教師ブリッジマン（Elijah Coleman Bridgman, 1801-1861）が創刊した月刊誌『中国叢報』の印刷業務に携わった。1835年には広州での安全が確保できなくなり、年末の12月、マカオに転居、同時に『中国叢報』の印刷もマカオで行われるようになった^[17]。ウィリアムズはこの後も、一時帰国の時期（1844-48年）を除き、1851年12月に停刊となるまで、『中国叢報』の印刷と編集に従事した。

1837年には米国オリファント商会（Oliphant & Co.）が、自社船モリソン号（*Morrison*）を用い、日本との貿易を開き、アメリカン・ボードの伝道拡大を求めようと、漂流民送還を企てた。同会の支配人キング（Charles W. King）が計画を練り、7月にマカオを発ち、琉球を経由して江戸に向かった。しかし日本の異国船無二念打ち払い令により、モリソン号は浦賀沖に停泊中、砲撃を受け、薩摩山川港でも砲撃を受け、目的を達することができずに8月末マカオへと戻ってきた。蘭学者グループがこの事件を知り、幕府の対応を批判する書を著し、蛮社の獄が起きた、その原因となったモリソン号事件のモリソン号である。ウィリアムズはこのモリソン号に参加している。そもそもウィリアムズが米国から広州に来るのに利用した船がこのモリソン号であり、そのさい船料もオリファントの厚意により無料にしている。爾来、ウィリアムズとオリファントとは交流があった^[18]。

この体験を機に、ウィリアムズは漂流民から日本語の学習をはじめた。そして漂流民の協力を得て1837年から38年へかけての冬、マタイ伝の日本語訳を、2年後には創世記の日本語訳を成した^[19]。1853年、ペリー（Mathew Calbraith Perry, 1794-1858）により日本遠征隊の日本語通訳の職を要請された。ウィリアムズは自分の日本語能力は日本人漂流民と会話ができる程度に過ぎず、それ以上の力はないと固辞するが、最終的には受諾し、1853年と1854年には遠征隊の一員として日本を訪れている^[20]。

ウィリアムズが『中国叢報』に『鼓銅図録』の翻訳を発表したのは1840年6月で、モリソン号事件の体験後であった。『鼓銅図録』は、銅の採鉱から精錬を経て製品（棹銅）に至る過程を図入りで説明する技術書であり、19世紀はじめに大坂の住友家が出版した^[21]。本書はシーボルト集書の中にも含まれていたが、ウィリアムズが使用したのは『中国叢報』の論説によれば、出島オランダ商館員ビュルガー（Heinrich Burger, 1806-1858）が1828年に広州に来たとき持っていた日本の書物の一冊で、広州の友人に贈ったものと説明されている^[22]。

ビュルガーはシーボルトの日本研究の助手として1825年来日、1827年に離任したが、バタヴィアへ戻る途中、乗船するオランダ船ロッテルダム号が、難風に遭遇、船は広州に退避した。船の修復もあり、ビュルガーは広州でしばらくの間過ごした。1828年6月にバタヴィアに戻ったが、シーボルトの後任を命じられ、慌ただしく8月にはコルネリス・ハウトマン号に乗り再来日している^[23]。本を贈ったという「広州の友人」とは不明だが、このとき広州にいたロンドン伝道会の宣教師ロバート・モリソンはビュルガーに出会っている。モリソンの私信によれば、ビュルガーはそのさい日本にモリソン辞書の翻訳の動きがあることを伝えたという^[24]。

論説では『鼓銅図録』の訳に入る前に、これとは別に二つの経緯で入手したとする日本の書物を9点あげている。一つはシーボルトが出島から帰国途中、バタヴィアで友人に寄贈し、それが当地（原文 here, マカオであろう）に伝わったもの、一つは日本人漂流民が所蔵していたものという。9点の書名は次の通りである。1. 『(頭書増補) 訓蒙図彙』（寛政元=1789版）21巻10冊、2. 『絵本鶯宿梅』（元文五=1740）9冊、3. 『古今泉貨鑑』（寛政二=1790版）1冊、4. 『女大学宝箱』（文化四=1807版）1冊、5. 『女学則操鑑』（天保五=1834版）1冊、6. 『万花百人一首常馨色』（寛政三=1791版）、7. 『東遊記』（寛政七=1795版）5冊、8. 『東遊記』後編5冊、9. 『漢和辞書』1冊（部首別の漢字を見出しに、片仮名で日本語の意味がつく）。

簡単に説明を加えると、1の『(頭書増補) 訓蒙図彙』は中村惕斎編の図説百科事典『訓蒙図彙』を改めたもので、『訓蒙図彙』に比べ図も解説も増補された。『中国叢報』の論説では本書は中国人学者が日本語を勉強するにも有益と述べている。2の『絵本鶯宿梅』は浪速の後素軒橘守国・作画の図入り事典。一般には7巻7冊とされる。『中国叢報』では9冊とするは不明。巻四は花鳥木之部、巻五は草花之部。3の『古今泉貨鑑』は古今和漢のコイン（通貨に限らない）を集めたもの。図入り。全20巻本。『中国叢報』の記述によればそのうちの巻一の「古文銭」1冊を、ウイリアムズは所蔵していたようである。4の『女大学宝箱』は貝原益軒の名を借りた女性向け教訓書。5の『女学則操鑑』も絵入りで女性の生き方を説いた書で、女訓集。女性伝を含む。6の『万花百人一首常馨色』は『国書総目録』では「江戸出版書目」を出典とし、所蔵先不載だが、ウイリアムズは所有していたようで、江戸刊で女性向けの歌集と説明している。7の『東遊記』と8の『東遊記』後編は、橘南谿著で京都より東の東国旅行記。同じ著者の『西遊記』とあわせた『東西遊記』は江戸時代よく読まれた。9の『漢和辞書』は『中国叢報』では厚い1冊と説明するだけで、詳細は不明である。

このうち、5の『女学則操鑑』と6の『万花百人一首常馨色』は「1835年に海南島で難破し、広州に運ばれた6人の船乗りの一冊」から入手したとされている。漂流民に関するこの説明は

正確でないが、1834年に宝順丸で漂流した尾張の音吉ら3人と、1835年に漂流した肥後の庄蔵ら3人〔注、力松を除く〕をさすと思われる^[25]。1837年にモリソン号に乗っていた漂流民たちである。彼らは帰国に失敗したのち、マカオでウィリアムズの家滞留していた。

ウィリアムズは印刷職人らしくこれら9点の本の造りについてもコメントしている。版木を用い、木おそらくカジノキの樹皮から製造した紙（八耳注、和紙のこと）に刷っている、これらは廉価本で、たとえば1の『訓蒙図彙』は1ドルあるいは1ドル半もしない、紙の質は悪く、特に琉球で入手した見本と比べるならばはるかに劣っている、という具合である。琉球で得た紙見本については、特に柔らかさ、白さ、均質さの点で、これまで見た中国や日本の職人によるどの紙よりも格段優れている絶賛している。琉球で入手した紙見本とは、モリソン号で江戸に向かう途中、那覇に寄港し、このときウィリアムズは入手したのであろう。

『鼓銅図録』は図入りで説明する14丁と漢文で説明する6丁から成り、図を除く文字部分が翻訳の対象とされた。最後にはツェンベリー（Carl Peter Thunberg, 1743-1828）による大坂の銅精錬所見学記録が付いている。ウィリアムズは博物学に詳しく、モリソン号に乗船を依頼されたのも、科学的研究調査のためであった（ペリー遠征隊の一員として来日したときもこの資質は発揮された^[26]）。『中国叢報』は欧文（大半は英文）で東方アジアの事情や文化を紹介する雑誌であり、日本の銅精錬技術を図入りで説明する本書は紹介に値すると考えたのであろう。ウィリアムズによる『鼓銅図録』の翻訳は、その後、イギリスの冶金学者パーシー（John Percy, 1817-1889）の目にとまり、彼の『冶金学』（*Metallurgy*, 1861）中に、「日本の銅溶融」との項目で紹介されている^[27]。

ウィリアムズは、その後も日本の書物を集めていたようで、ペリーにウィリアムズを引き合わせる機会をつくったとされる貿易商パーマー（Aaron Haight Palmer）は、ウィリアムズが日本語の図書の小文庫や6フィート平方の日本で作成された江戸の地図を持っていたと証言している^[28]。

マカオと広州を行き来し、尾張の3人の漂流民を引き受けたギュツラフ（Karl Friedrich August Gützlaff, 1830-1851）も、漂流民から日本語を習い、通訳としてモリソン号に乗り込んだことや、最初の邦訳聖書である『約翰福音之伝』（シンガポール、1837）と『約翰上中下』（シンガポール、刊年不明）を作成したことはよく知られている^[29]。彼の日本語の知識は、漂流民とメドハーストの『英和・和英語彙』によるものであったが、ギュツラフが日本の書物を所持していたのかは明らかでない。

マカオや広州には宣教師や商人などの欧米人が多数いた。しかし彼らの関心はせいぜい中国までで、日本に及ばなかった。滞在する中国との関係も安定していなかった。日本情報は出島

商館を介してしか入手できず、日本のことに興味をもつ契機は閉ざされていた。日本語を学ぶ環境もなく、日本の書物がマカオや広州に持ち込まれていたとの記録を筆者は知らない。ウイリアムズの例をあげたが、上記のようにオランダ商館経由で伝わる書物か、まれに漂流民が持ち込む書物が、当地での日本の書物のすべてであったと思われる。

3 上海ロンドン伝道会蔵書目録（1857）にみる西洋の書物

日本の書物は注目されなかったが、中国の書物は中国文化の研究のため収集された。これらは現地で使用されたほか欧米諸国にも送られた。ユニバーシティ・カレッジ（University College, London）の中国語学・文学教授のキッド（Samuel Kidd, 1799-1843）が編集した『王立アジア協会所蔵中国図書目録』（ロンドン、1838）はその一例を示している^[30]。同目録には、言語 29 点、歴史 15 点、統計・地勢 15 点、伝記 2 点、詩 11 点、自然科学 7 点、道徳哲学 28 点、形而上学・学芸 25 点、古事 4 点、清朝政府刊行物 3 点、儀礼・儀式用法 7 点、法典 13 点、医学 14 点、地図・図 5 点、仏教 13 点、三教（儒教・仏教・道教）3 点、漢訳キリスト教書 10 点、小説 23 点、旅行記 3 点、少年向け書 6 点、雑 6 点、計 232 点が収録されている。マラッカに 1818 年に創設された英華書院（Anglo-Chinese College）も図書室を備え西洋の書物と中国の書物を所蔵していた^[31]。

広州には 1806 年に設立された英国商館図書室があり、1832 年の目録によれば、約 1600 点 4000 冊の蔵書があったという^[32]。この英国商館図書室はイギリス東インド会社の貿易独占権の廃止にともない 1834 年に解散し、蔵書はいったん数人の個人のもとに分散したが、1836 年創立のモリソン教育協会の蔵書へと継承された^[33]。

中国図書に対し、西洋の出版物はどのような書が読まれていたのであろうか。西洋図書の所蔵状況は、当時の在華西洋人の読書傾向や書物文化を伝え、さらに西洋文化を伝える中国書が著された場合、その底本や参考本を推定するきっかけともなる。ここでは墨海書館の出版物を考えるため、上海のロンドン伝道会図書室が 1857 年に発行した『上海ロンドン伝道会蔵書目録』（全 102 ページ）^[34]を見てみよう。

本目録は洋書、中国書、追記の 3 部から構成される。洋書の部は、7 人の保管者別に書目が配列されている。最初はメドハースト保管図書で 527 点（ロンドン伝道会蔵書 368 点、冊子協会蔵書 159 点）、次はエドキンス（Joseph Edkins, 1823-1905）保管図書で 13 点、以下、ウイリアムソン（Alexander Williamson, 1829-1890）保管図書 32 点、ジョン（Griffith John, 1831-1912）保管図書 18 点、ミュアヘッド（William Muirhead, 1822-1900）保管図書 50 点、ワイリ（Alexander Wylie, 1815-1887）保管図書 4 点、ロックハート（William Lockhart, 1811-1896）保管図書 359 点、

となっている。計 1003 点の半分以上をメドハーストが保管、残りの 4 分の 3 をロックハートが保管していたことになるが、これは当時の宣教師の役割・地位を表していると思像される。ワイリは 1850 年代盛んに科学関係の中国書を刊行したが、彼が保管するロンドン伝道会蔵書は、モリソン書 2 点、マーシュマン (Marshman) 書 1 点、ヘンリ (Henry) 書 1 点の僅か 4 点しかない。ワイリは印刷職員の身分にあり他の宣教師に比べ地位も給料も低かった^[35]。

目録は著者と簡単な書名だけで、刊行年はなく、どの版が所蔵されていたのかまではわからないが、概略は把握することができる。メドハーストの保管図書にはラードナーのキャビネット・サイクロペディア (Lardner's Cabinet Cyclopædia) の書物があり、スウェインソン (William Swainson) の博物学関係書やハーシェル (John Frederick William Herschel) の科学書などが揃えられていた。『植物学』を著述したウイリアムソンの保管図書には、リンドレー (John Lindley) の *Vegetable Kingdom* と *Elements of Botany* の書名を見ることができる^[36]。18 世紀末から 19 世紀前半に大きな影響力をもった自然神学者ペイリー (William Paley) の著作もある。ペイリーの書はジョンやロックハートも保管しており、宣教師にとっての必読書であったのであろう。ユークリッドの『幾何学原論』も人気のある書で、3 人の保管図書の中にそれぞれ存在が認められる。ワイリが『続幾何原本』を 1857 年に刊行したのは、中国側に希望があったにせよ、こうした知的環境が背景にあったと考えられる。ライエル (Charles Lyell) の『地質学原理』をはじめ、最新の代表的な医学書や化学書も見られ、19 世紀前半期における話題の自然科学書は上海まで船載されていたのである。J. S. ミルの『経済学原理』やアダム・スミスの『国富論』も保管されていた。

中国書は 642 点収録されているが、これはロックハートがロンドン伝道会に寄贈したものである。ワイリが *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese* (1867) に掲載したプロテスタント宣教師の中国書も数多く含まれている。メドハーストやギュツラフなどの 1820 年代、1830 年代の著作^[37] も含まれているのは注目されよう。ロックハートの蔵書をまとめたものとしては『ロンドン伝道会蔵ロックハート図書・一般図書目録』(1899)^[38] がよく知られているが、これはロックハートが晩年の 1892 年にロンドン伝道会に寄贈した約 3800 点の図書やパンフレットを収録するもので、序によればロックハートは 50 年以上、暇をみつけては、はじめは中国で、その後はロンドンや他のヨーロッパの首都でこれらの書物を集めたものとされている。だがこの 1899 年の目録には、メドハーストやギュツラフの初期の刊行物はなく、『上海ロンドン伝道会蔵書目録』(1857)の方が、ロックハートの初期のコレクションを表していると思われる。

追記の部にはメドハースト所蔵書、保管書のほか、次の 13 点の科学機器が収録されている。

1. 空気ポンプや空気作用装置入りの箱、2. 走馬燈、アルガンランプ、天文・風景・その他の

スライド, 3. グリフィンの化学器具セット, 4. ガラス製水ポンプと瓶, 5. 6個の電槽を備えた電池, 6. 多目的用電磁気機器, 7. 医療用電磁気機器, 8. 化学的目的用ガラス管とガラスびん, 9. 化学薬品, 10. 陶製灯火炉, 11. 試験管, 12. ディビーのミルナーズ・ランプ, 13. ランプ・ガラス・灯心・スタンド・蒸発皿。ロンドン伝道会は本の出版だけでなく、これらの器具や装置を用い、科学の公開実験^[39]をおこなっていた可能性を示している。近年の劉建輝の論文によれば、墨海書館で蒸気機関の実演が不定期におこなわれていたという^[40]。

おわりに

シーボルト以前にケンペル (Engelbert Kämpfers, 165-1716) やティツィング (Isaac Titsingh, 1745-1812), プロムホフ (Jan Cock Blomhoff, 1779-1853) が日本の書物を収集したことが知られている。彼らは全て出島滞在者であった。ケンペルが収集した書物・地図は18世紀にハンス・スローン (Hans Sloan, 1660-1753) が購入し、現在、大英図書館に所蔵されている。ティツィングはパリの国立図書館に寄贈した。プロムホフ収集文献はライデン国立民族博物館に所蔵されている。

アジアに赴任していたプロテスタント宣教師はこれらを見ることはできなかった。メドハーストにしてもウイリアムズにしても、出島帰りの人物を通じて、あるいは漂流民を通じて日本の書物を閲覧しており、いわば偶然に日本の書物に接触したことになる。このことをどのように評価するかであるが、両事例ともまずシーボルトが関係していることは注目されよう。メドハーストはシーボルトと交流を重ね、ウイリアムズはシーボルトが友人に贈呈した書物を入手した。シーボルトが大量の日本の書物を持ち出したことが、二人の日本語知識へとつながっているのである。本稿ではさらにフィッセルとメドハーストの関係を示唆したが、シーボルト着任時の出島商館長であるスチュルレル (Johan Wilhelm de Sturler, 在任 1823-1826) も日本の書物を収集していた^[41]。

出島商館勤務員と在華プロテスタント宣教師とを結ぶ糸は細かった。しかしシーボルトに代表されるオランダにおける日本研究の関心の高まりは、中国周辺で活動を開始していたプロテスタント宣教師に日本研究の端緒を開いた。メドハーストしかりであり、ウイリアムズも漂流民という教師がいたが、出島から持ち出された日本の書物との出会いが (例えば『(頭書増補) 訓蒙図彙』を考えてみても)、日本語学習に広がりを与えたことは想像に難くない。その結果として編まれたメドハーストの『英和・和英語彙』は日本に伝わり、幕末に日本版の刊行を見た。ウイリアムズはペリー遠征隊の日本語通訳となり、日本人の前に現れた。江戸時代、入華宣教師を介して日本の書物や日本語が往還したのである。

書物は文字を読む人がいて初めて成立する。ケンペルをはじめシーボルトらの収集した日本の書物は学問の本より、絵入り書や日用書・一般書が多くを占めたことが知られている^[42]。ウィリアムズは入手した本を安価で紙質が劣ると酷評したが、これは一般書であったからである。しかしこうした日用書・一般書が出回ることにより江戸時代の出版文化は活発化し、多数の読書人口がそれを支えた。本稿で紹介したように漂流民も江戸時代に和歌として最も親しまれた百人一首の本を所持していた。入華宣教師は中国語の著作物を作るだけでなく、それらを大量に印刷した。これは漢字文化圏における多数の読書人口の存在が想定されていたことを示している。西洋においても多数の読者人口の出現は近代に属する。19世紀になり多くの入門書や百科事典が著されたが、これは読書人口の拡大と結びついていた。本発表で取り上げた1857年の上海ロンドン伝道会蔵書目録にもこの動向を読み取ることができる。入華宣教師の中国語著作物はまさに東アジアにおける出版文化と西洋における出版文化の上に成立していたのである。

付記：本稿は2005年3月12日から13日にかけて上海・同済大学で開かれた、同済大学外国語学院日語系・漢字文化圏近代語研究会共催「2005 上海 国際シンポジウムー西洋学問の受容及び漢字訳語形成と伝播ー」で発表した原稿を増補したものである。同シンポジウム開催に関係された方々、発表を聞きコメントを下された方々に感謝いたします。ピュルガーが1827年に広州に滞在した経緯を記した梶輝行論文を教示して下さった大沢眞澄氏にも謝意を表します。

注

- [1] 孫建軍は西洋人宣教師が著した漢訳洋書に残る訳語の不統一から、方言の差異、宣教師グループの対立を指摘している。孫建軍「西洋人宣教師の造った新漢語と造語の限界」、『日本研究（国際日本文化研究センター紀要）』第30集（2005年），pp.323-337.
- [2] 2004年2月10日に国際日本文化研究センター（京都）で開催されたシンポジウムのテーマは「近代日中における漢語概念の往還」であった。最近の研究としては、舒志田「『全体新論』と『解体新書』（重訂版を含む）との語彙について——日本の洋学から中国への影響の可能性」、『或問』第8号（2004年），pp.53-74.がある。
- [3] 沈国威「解題——近代東西（欧・中・日）文化交流史研究の資料としての『六合叢談』」，沈国威編著『『六合叢談』（1857-58）の学際的研究』（白帝社，1999年），p.8.
- [4] メドハーストの伝記と著作については，Alexander Wylie, *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese: giving a list of their publications, and obituary notices of the deceased*(Shanghai: American Presbyterian Mission Press, 1867), pp.25-41, 都田恒太郎『ギョツラフとその周辺』（教文館，1978年）参照。
- [5] W.H.Medhurst, *China: Its State and Prospects*(London: John Snow, 1838), pp.341-343. この部分については邦訳がある。都田『ギョツラフとその周辺』，pp.35-38.
- [6] 『英和・和英語彙』については次の複製本がある。『英和・和英語彙』（キリスト教資料刊行会，1970年）。加藤知己・倉島節尚編著『幕末の日本語研究：W.H.メドハースト英和・和英語彙—複製と研究・索引』（三省堂，2000年）。
- [7] 『和魯通玄比考』は天理図書館蔵本が，Classica Japonica のファクシミリ版シリーズの一冊として，天理図書館発行，雄松堂書店発売（1974年）で複製されている。該当の箇所はp.XIII.
- [8] 杉本つとむ『近代日本語の新研究』（桜楓社，1974年），pp.401-403. 佐藤喜代治編『国語学研究事典』（明治書院，1977年），pp.790-791.
- [9] シーボルトの詳細な年表は，石山禎一編「シーボルト生涯・業績および関係年表」，石山禎一・沓沢宣賢・宮坂正英・向井晃編『新・シーボルト研究Ⅰ 自然科学・医学篇』（八坂書房，2003年），pp.299-364.参照。特にバタヴィア着発の月日はp.326.による。
- [10] 目録が，シーボルト記念館編『フォン・ブランデンシュタイン家所蔵 シーボルト関係文書マイクロフィルム目録』全2巻（長崎市教育委員会，2001年）として刊行されている。フォン・ブランデンシュタイン家はシーボルトの末裔にあたり，シーボルト父子の個人的文書記録を所蔵している。これがマイクロフィルムに収められ，現在，長崎シーボルト記念館で閲覧することができる。

- [11] それぞれのマイクロフィルム番号は、92268. 92271, 100567. 100645. 100616. 100567, 81928, 81921. 41366. 40792。
- [12] 向井晃編「シーボルト収集の和書（付）シーボルト門人蘭語論文目録」, 前掲『新・シーボルト研究Ⅰ』, pp.271-298.
- [13] 杉本つとむ『西洋人の日本語発見——外国人の日本語研究史 1549～1868』（創拓社, 1989年）, pp.212-214.
- [14] 尾崎賢治訳『シーボルト『日本』第5巻』（雄松堂書店, 1978年）, pp.106-107.
- [15] W [illiams] , "Ko Doü Dze Roku, or. A Memoir on Smelting Copper, illustrated with plates." *The Chinese Repository*, Vol.IX（1840）, pp.86-101.
- [16] ウィリアムズの伝記は、Frederick Wells Williams. *The Life and Letters of Samuel Wells Williams, LL.D., Missionary, Diplomatist, Sinologue*（New York: G.P.Putnam's Sons, 1888）ほか Wylie. *Memorials*, pp.76-79. や洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』（雄松堂書店, 1970年）序章, 解説, 参照。 *The Life and Letters of Samuel Wells Williams* は最近, 中国語訳が出た。顧鈞, 江莉訳『衛三畏生平及書信：一位美国来華传教士的心路歷程』（広西師範大学出版社, 2004年）。
- [17] Williams. *The Life and Letters*, pp.80-81.
- [18] 来華にモリソン号を使用したことは、Williams. *The Life and Letters*. p.49 参照。ウィリアムズはオリファントに尊敬の念を抱き、自分の息子にオリファントと名前をつけている（同書, p.182）。
- [19] Williams, *The Life and Letters*, pp.99-100. 海老澤有道『日本の聖書』（講談社学術文庫, 1989年）, pp.119-124.
- [20] Williams. *The Life and Letters*. p.185. このときのウィリアムズの日誌が、洞富雄訳『ペリー日本遠征随行記』として訳出されている。
- [21] 鼓銅図録には次に複製されている。青木国夫ほか編『江戸科学古典叢書1』（恒和出版, 1976年）。三枝博音編『復刻日本科学古典全書4』（朝日新聞社, 1978年）。浅見恵・安田健訳編『近世歴史資料集成 第II期第IV巻 日本産業史資料(4)』（霞ヶ関出版, 1992年）。
- [22] W [illiams] . *The Chinese Repository*. Vol.IX p.86.
- [23] ビュルガーが『鼓銅図録』を広州にもたらしたとは、長崎大学薬学部編『出島のくすり』（九州大学出版会, 2000年）, pp.33-34 より知った。ビュルガーについては同書「日本最初の近代的薬剤師ビュルガー」（塚原東吾執筆, pp.23-34）, 『新・シーボルト研究Ⅰ』, pp.50-56. 66. 322, 『新・シーボルト研究Ⅱ（八坂書房, 2003年）, p.76, 参照。またビュルガーが1827

年に長崎からバタヴィアへ戻る途中、暴風雨に遭い、広州へ避難したことは、梶輝行「蘭船コルネリウス・ハウトマン号とシーボルト事件——オランダ商館長メイランの日記に基づく考察を中心に——」『鳴滝紀要』第6号(1996)、pp.154-200を見よ。

- [24] Eliza Morrison, *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison, D.D.* (London: Longman, Orne. Brown. Green and Longmans, 1838) , Vol.II, pp.412-413. この私信は 1828 年 11 月 18 日, 28 日, 29 日に記されている。これによると, 日本からの外科医でオランダのために勤務しているビュルガー (原文 Burgher) と食事をし, モリソン辞書について話し合ったとされている。このビュルガーで間違いのないと思われるが, 1828 年 11 月ではビュルガーは出島に到着し公務を開始しているため (註 23, 梶論文, p.181), 1827 年の誤りであろう。
- [25] 漂流民については, 春名徹『につぼん音吉漂流記』(中公文庫, 1988 年), 同『世界を見てしまった男たち——江戸の異郷体験』(ちくま文庫, 1988 年) 参照。力松を除くとは, 洞富雄訳『ペリー日本遠征随記』解説, pp.530-531 による。
- [26] S.Wells Williams. "Narrative of a voyage of the ship Morrison. captain D.Ingersoll, to Lewchew and Japan, in the mouths of July and August, 1837." *The Chinese Repository*, Vol.VI (1837) , pp.209-229 中 p.211. Williams. *The Life and Letters* , pp.218, 222.
- [27] John Percy, *Metallurgy* (London: John Murry, 1861) .pp.392-395. 今井典子「鼓銅図録」, 『すみとも』第 17 号 (2001 年) , pp.6-9.
- [28] 洞富雄訳『ペリー日本遠征随記』, p.531.
- [29] 都田恒太郎『ギョツラフとその周辺』, pp.282-308, 海老澤有道『日本の聖書』, pp.105-118.
- [30] S.Kidd, *Catalogue of the Chinese Library of the Royal Asiatic Society*(London: John W.Parker, 1838), 58p.
- [31] *The Indo-Chinese Gleaner*, No.III (1818) , pp.68-71. 英華書院については, Brian Harrison. *Waiting for China* (Hong Kong: Hong Kong University Press, 1979) 参照。
- [32] *The Chinese Repository*. Vol.IV (1836) , pp.96-97.
- [33] 同上, pp.97-98.
- [34] *Catalogue of the London Mission Library, Shanghai* (Shanghai: London Mission Library, 1857) . 筆者はロンドンにあるウェルカム図書館蔵ホブソン文書の中からこの目録を見た (文書記号 MS.5852/68) 。
- [35] 沈国威編『『六合叢談』(1857-58)の学際的研究』, pp.13-14.
- [36] 沈国威『植学啓原と植物学の語彙——近代日中植物学用語の形成と交流』(関西大学出

版部，2000年）では、『植物学』（1858）は、リンドレーの *The Elements of Botany*（1847以降の版）を底本に、『*The Vegetable Kingdom*』を参考にした可能性が高いと述べる（pp.37-38）。

リンドレーについては生誕二百年記念出版物 William T. Stearn, ed.,

John Lindley 1799-1865: Gardener - Botanist and Pioneer Orchidologist(Suffork:

Antique Collectors' Club, 1999)が参考になる。リンドレー著書の出版一覧が付く。

- [37] メドハーストの書としては、『地理便童略伝』（1819），『咬[口+留]吧総論』（1826），『東西史記和合』（1829）が、ギュツラフの書としては、『大英国人事略説』（1832），『大英国統志』（1834），『万国地理全集』，『古今万国綱鑑』（1838），『猶太国志』（1839），『貿易通志』（1840），『制国之用大略』があげられている。初期の雑誌である『察世俗每月統記伝』，『特選撮要』，『天下新聞』（1829），『東西洋考毎月統記伝』（1833-1838），『各国消息』（1838）も目録に収録されている。

- [38] Goodeve Mabbs, *Catalogue of Books contained in the Lockhart Library and in the General Library of the London Missionary Society* (London: London Missionary Society, 1899), 320p.

- [39] 科学の公開講座については、永田英治『たのしい講座を開いた科学者たち—科学と科学教育の源流』（星の環会，2004年），吉田忠「18世紀オランダにおける科学の大衆化と蘭学」，同編『東アジアの科学』（勁草書房，1982年），pp.50-108 参照。

- [40] 劉建輝「近代中国におけるプロテスタント宣教師の文化活動—上海・墨海書館を中心に」『日本研究（国際日本文化研究センター紀要）』第30集（2005年），pp.295-304.

- [41] 杉本つとむ『杉本つとむ著作選集 10 西洋人の日本語研究』（八坂書房，1999年），p.302.

- [42] ユーイン・ブラウン「大英図書館所蔵ケンペル将来日本図書の意義」，ドイツ-日本研究所ほか編集発行『ドイツ人の見た元禄時代：ケンペル展』（1990-1991），pp.102-110，向井晃「シーボルト『日本研究』の情報源—収集図書類，門人提出論文を主に」，『新・シーボルト研究 I』，pp.217-232.